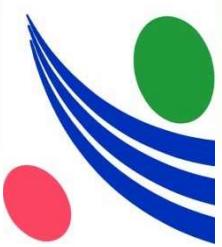


# 座間市の郷土史にかかわる 教材の開発について

座間市教育研究所  
教育課題研究員



座間市マスコットキャラクター「ざまりん」



# 第1部

郷土史にかかわる  
教材の開発に至る経緯

# 「豊かな心を育むひまわりプラン」

平成16年度から

座間市 学校教育の重点主題

## 「豊かな心の育成」

豊かな心 = 実り多い豊かな自己実現が果たせる心

## 「豊かな心を育むひまわりプラン」を策定

- ・教育指導課が所管するすべての事業の根幹
- ・平成23年度から10年間
- ・「学校教育指導計画」もこれに基づいて改訂

# こんな大人になつてほしい

子どもも自身がどんな大人になりたいか、理想的な目標を持たせる。  
ひまわりプランの核となる目標。

- 自分のよさを大切にし、健康で自立した生活を送る。
- 正義を尊び、自らを律し、責任ある行動をとる。
- 目標に向かって学び続け、新たな価値を創造する。
- 温かな心で人ととかかわり合い、奉仕の心で人の役に立つ。
- 郷土への愛と誇りをもち、国や社会の発展に尽くす。

# ざまっ子 ハつの誓い

- 1 毎日明るく元気にあいさつします。
- 2 家族を大切にします。
- 3 友達を大事にします。
- 4 困っている人に手をさしのべ、優しく接します。
- 5 人の役に立つことを進んで行います。
- 6 何事にも積極的にチャレンジし、粘り強く取り組みます。
- 7 約束や決まりは、いつでもしっかりと守ります。
- 8 自然を大切にし、地球上に優しい生活をします。

市内小学校5年～中学校3年 全児童生徒にアンケート。  
児童生徒が選択して決定。

# 推進委員会において選定された人物

- 1 鈴木利貞 すずきとしさだ（1860～1938）教育者  
幼年会を作り、明治から昭和初期の子どもたちに、自分たちの村をよりよくする  
自主的行動ができるように指導、学社連携の礎を築いた。
- 2 廣政三 いおりまさぞう（1901～1971）医師  
患者のために昼夜を問わず診療に従事、貧しい人には無料で診察  
地域の人達から「聖医」と慕われた。
- 3 村上ミキ むらかみみき（～1956）篤志家  
米国ソルトルークシティに渡り、ホテル業で成功、里帰りした折りに1000\$を座間町に  
寄付。亡くなるまで座間の子どもたちにお年玉を送り続けた。
- 4 高松ミキ たかまつみき（1899～1941）女性運動家  
座間村処女会の育ての親。女子青年会活動の規範を幼年会で学んだ。
- 5 大矢泰臨 弥市 おおやたといりんやいち（1838～1913）篤農家・教育者  
幕末、村民教化のため私財で「郷学校誠志館」を設立。のちに栗原学校設立。  
栗原村戸長、学区取締など重職を歴任。
- 6 瀬戸吉五郎 せときちごろう（1868～1944）実業家  
蚕種改良と製造に尽力、良質の蚕種を作った。初代座間郵便局長。

## 第2部

教材の主人公  
鈴木利貞と幼年会について

# 明治中頃の座間

- ほとんどが農家　・・ 米、麦、養蚕
- 小作農が多い　・・ 貧しい家が多い  
子どもたちも働く
- 隣村との対立　・・ 江戸時代の政策  
(大きな一揆を防ぐ)
- 悪口 けんか  
弱い者いじめ 日常的に存在

# 鈴木利貞（すずきとしさだ）



明治十五年（1882年）

座間村 河原宿に生まれる

- ・自営農家の次男
- ・兄が幼くして亡くなり、あと取りに
- ・病弱
- ・小学校でいじめられる
- ・読書が好き

# 読書好きだった利貞

竹小父(たけおじ)の影響  
鈴木家に出入りする男性  
もと御典医(ごてんい)？  
利貞に歴史物語などを話した

利貞 「竹小父はどうしてそんなに  
面白い話を知っているの？」  
竹小父 「それはたくさん本を読んだからさ」

利貞の読んだ本の例

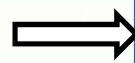
利貞8歳 源平盛衰記  
利貞14歳 伊勢物語、徒然草、方丈記、三国志、十ハ史略など

# 中学校進学

明治三十年（1897年）高等小学校卒業  
神奈川県尋常中学校（現希望ヶ丘高校）を受験  
(ちなみにこの学校の開校初年度)

父は反対

「農家を継ぐ者に学問は要らない」



母と小学校の教師が説得



条件：中学一年の入試ではなく、とび級で中学二年の編入試験を受けたならばよい  
(ハーダルを上げた)

座間村でたたか一人合格  
下宿生活 → やがて寄宿舎生活

体調を崩す 自宅療養したが回復せず

中学三年の終わりに自ら中途退学

# 幼年会の始まり

農作業があまりできず、読書、勉強、友人と語り合う

## 結論

この村の現状を変えるには、小さい子どもたちを教育する

## 「夜のお話し会」を始める

農閑期の土曜夜

- ・利貞の自宅に子どもたちを招く
- ・利貞が本を読み聞かせる

**話の中で、いじめや差別をしないように説く**

お話し会は「**幼年会**」と呼ばれるようになる  
座間村全域から多くの子どもが集った

# 火事による幼年会の広がり

明治三十四年（1901年）

火災によつて鎌木家全焼

**幼年会は中斷**

しかし村のあちこちから

「家でお話し会ができるなら、こちらに来て話してほしい」

利貞は村の遠くの地域にも出向いて話をした  
今まで利貞の家まで来るこのできなかつた小さい子も参加できる

幼年会活動が村中に広がる



利貞の考え方も村中に広がる

# 柿の木の下の誓い

みんなが仲良くすることの大切さを利貞から教わった子どもたちが、柿の木の下で遊びながら自発的に決めた約束

- ・これからは皆仲よくして、家の方で遊ぶ時も、学校で先生の言はれる通りにしよう。
- ・まず大きい者は小さい者を大切にして可愛がる事。
- ・小さい者は大きい者の言ふことを聞く事。
- ・喧嘩や、悪いたずらをしない事。悪口を言はぬ事。

# 利貞 小学校の代用教員に

座間小学校 井上連作校長に見いだされ  
教師になるよう説得される

## 井上校長の評価

- ・幼年会は子どもたちや地域に役立つ活動
- ・利貞は後身をよく導き  
自分の村を育て  
自分の村に永遠に福祉を残す

明治三十五年(1902年)  
利貞、悩んだ末に座間小学校代用教員になる  
このとき19歳

# 幼年会の発展

子どもたちこそ 将来、理想の座間村を創る人材として育てる



自分の考え方を伝えられる  
みんなが助け合って暮らせること  
自分たちの村は自分たちでよくする

## 具体的行動例

- ・子どもたち自身で本を買い、共有する
- ・公徳箱の設置
- ・神社清掃
- ・みんなで遠足に行く
- ・子どもたちが働いて遠足に必要な費用を作る  
(貧しい家の子は、相模川を渡る船賃が払えない)
- ・労働収入は幼年会の財産として貯蓄もし、将来大きな建物を建てる

働く内容 水田耕作、新聞配達  
タニシ取り、イナゴとり  
縄ない、麻糸つなぎ など

# 通学班と組長制度

近所の子どもが一緒に登校する → 「通学班」ができる

その女子リーダーが自分で作ったルール、「通学心得」が他の地域にも広まる

## 通学心得

言葉遣いに気をつけれる

無駄遣いをしない

登校時には学校の出来事を話し、みんなで学校で習った歌を歌うこと  
雨や雪の日等に下駄の鼻緒が切れないように日頃から気をつけること

暴風や雷の時、上級生が指図するまで学校に控えていること

学校では、先生の教えに従い、家では父母や年上の者の言葉に従うこと

通学班のリーダー → 「組長」と呼ばれる  
組長のリーダーシップで他の子どもを指導する「組長制度」へ発展

座間小学校の学区全域に幼年会を設立  
学校教育と地域が一体に

# ジヤンボリーダ会

大正十一年(1922年)  
イギリス皇太子訪日に際し  
日本ジヤンボリーダ会を開催  
全国から「ボーイスカウト」に近い集団が  
東京に招集された

座間幼年会は神奈川県唯一の代表として参加

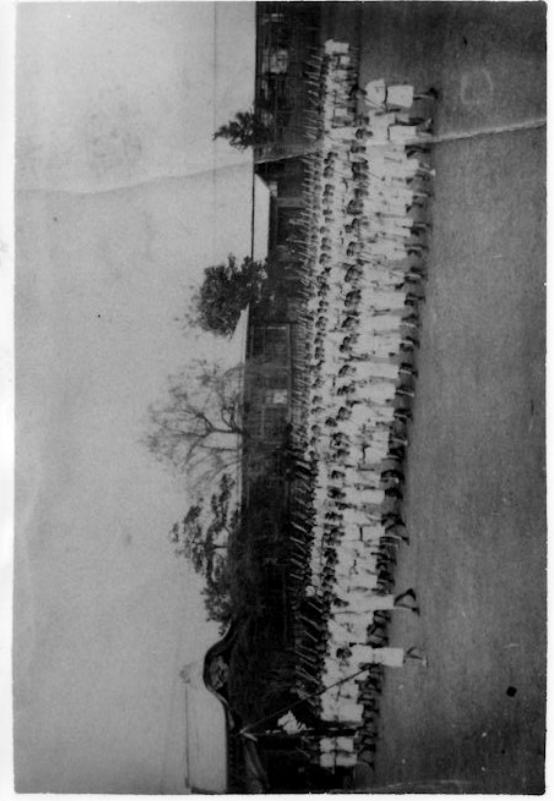
しかし…

ボーイスカウトは男子の集団  
女子の参加は主催者から認められなかつた

これに対する利貞の行動

- ・主催者に抗議 .. 認められず
- ・女子を会場に連れて行つてしまふ .. 参加と宿泊を拒否される
- ・女子を座間に帰す
- ・女子の名を書いた幼年会の旗を自分の身体に巻いて参加

利貞は、女性が差別されることのない世を作りたかった



# その後の利貞と幼年会

大正十三年(1924年)

県立厚木中学校(現厚木高校)に転勤  
それでも幼年会を支援し続ける

昭和二年(1927年)

少年教育の功により、高松ミキとともにに県知事表彰を受ける

昭和十三年(1938年)

厚木中学校の授業中に体調不良を訴える  
帰宅途中に昏睡 帰らぬ人に 55歳  
葬儀に参列した人の列は宗仲寺から鈴木家まで約1kmにも及んだ

太平洋戦争に突入したころ

小学校の関係職員が他校に異動  
指導者たる卒業生が出征などの理由により  
幼年会活動は急速に衰え、ついに終焉を迎えた

# 戦後のまちづくり

幼年会の出身者たちは戦後の座間のまちづくりにも大きく関わった

昭和二十三年（1948年）

戦時中、軍都（ぐんと）として合併させられていた相模原町から 座間町が独立

座間中学校

住民が力を合わせて建設

予算の確保、資材集め

資材は旧軍施設から町民自身が運んだ

幼年会は大正期から各集落に「俱楽部」と呼ばれる建物を作っていた

俱楽部は幼年会活動場所として子どもたちが管理した  
公民館建設時、町民一同共通イメージを持つことができ、すぐ行動できたり  
「俱楽部の大きいものを作ればいい」

昭和二十九年（1954年）

神奈川県内初の公民館完成

谷戸山（やとやま）の自然と歴史を残そう .. 公園化に尽力

### 第3部

## 教材開発の過程

# 郷土学習のための副読本

## 1冊の本で 市全体の地理、歴史、産業などを網羅するもの

広い地域と広い分野を扱う それぞれの内容は薄くなる

多くの市で副読本を作成し、授業で活用している。

座間市では 小学校用「わたしたちの座間」  
中学校用「郷土読本座間」

## 特定の地域や内容を 詳しく書いたもの

狭い地域か狭い分野を扱う それぞれの内容は深くなる

他市では、自校の学区のみのガイドブックを作っている学校もある。  
その市の出身者を扱った道徳資料を作している市もある。  
今回我々が作成する教材は一人の人間を扱うのでこちらに属する。

# 本教材開発の目的

「ひまわりプラン」の「めざす大人像」に即して

- ・過去に郷土のためににつくした座間出身者をとりあげる

- ・今的孩子たちがこれを読み  
自分たちの郷土に誇りを持てるような「読み物」を作る

学術資料ではない

- ・読んで欲しい対象は 小学校6年生～中学校3年生
- ・大人を対象としたレベルの言葉遣いをする
- ・難しい言葉にはルビをふる、または注釈をつける
- ・当時の言葉遣いはそのまま表記する
- ・数名の人物に対して、一人一話を書く

# こんな大人になつてほしい（再掲）

- 自分のよさを大切にし、健康で自立した生活を送る。
- 正義を尊び、自らを律し、責任ある行動をとる。
- 目標に向かって学び続け、新たな価値を創造する。
- 溫かな心で人ととかかわり合い、奉仕の心で人の役に立つ。
- 郷土への愛と誇りをもち、国や社会の発展に尽くす。

まさに鈴木利貞の人生そのもの

# 教材開発上の問題

## 1 残されている資料の量が、人によって大きく異なる

鈴木利貞、幼年会に関してはすでに多くの研究報告が発行されている

テーマを設定し、それにあてはまる内容のものを  
多くの研究や資料の中から絞る必要がある。

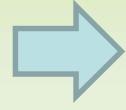
## 2 子どもが読むのに妥当な長さはどれほどか

道徳の授業で話し合い活動を中心にするなら A4 10ページほど

読み物資料とするなら A4 20～30ページ

# テーマの設定

鎌木利貞が目指したもののは何か  
そしてそれがどのように実現していったか  
現代に通じるもののは何か



- ・自分たちの村は 自分たちの手でよくしていこう
- ・そのためにはまず子どもたちにその意識を持たせよう
- ・貧富、性別、身分などの違いで差別がない世にしよう

これが村の人々や学校に受け入れられ、実現していく過程で  
何度も挫折があったが、それを乗り越えて偉業を成し遂げた

# 資料作成

## 鈴木利貞

座間市教育研究所に設けた「教育課題研究員会」で執筆  
メンバーは市内小中学校の教員4名

## 庵政三

現在教育委員長をされている 馬場悠男氏が執筆

- 平成26年度中に  
教材として各校に配付予定

## 最後に

- ・座間市にこのようなすばらししい業績を残された先人が  
あつたこと、改めて驚きと感動を覚えました。
- ・生活もままならない中で子どもたちの教育に目を向け、  
できることから始めたことがすばらしいと思いました。
- ・豊かな心を持つといいうのは決して物ではなく、志の高さ、  
感性を磨くことなのだと考えさせられました。
- ・教室で「豊かな心」とは何なのか話し合うことができたら  
教材開発をした甲斐があると思いました。

# 金木利貞は

「自分たちの村は 自分たちの手でよくしよう」  
という 高い志を持ち  
幼年会を立ち上げ  
教育に取り組んだ

座間は  
気品のある教育尊重の街